

対話から始まる国際教育！

オンライン国際交流で新しい世界が見えてきた

小国町教育委員会 山形県立小国高等学校魅力化コーディネーター 阿部 宣行, Bryan Day, 坂口 裕紀

キーワード：高校魅力化, 国際教育, 教科横断, 国際交流基金, 国際協力機構

実践の概要

山形県立小国高等学校は教員と高校魅力化コーディネーターが連携し、オンラインで世界中の人たちと交流を行っている。海外の同じ世代とオンラインで交流できることで「どんな場所に住んでいても世界の誰とでも繋がれる感覚」が生徒たちに芽生えた。今年度は7カ国を対象に10回実施（表1）。

1. 目的・目標

(1) 生徒たちが、グローバルな視点を持ち、多様性を受け入れることができるように

都会から遠く離れた豪雪山山間地域で育ち、全校生徒65名の限られた人間関係の中で生活してきた小国高校生たちが、インターネットで国境を超えて自由にコミュニケーションできる感覚を養ってもらいたいと考えている。

(2) 自分はどう生きるのか？

ICTを活用し、生徒たちの視野を広げ、世界の文化・考え方・風習の違いを認識し、互いを尊重する力を育てたい。その過程で生徒たちは、「日本人であり、小国人である自分はどう生きるのか？」という問いに向き合うことになる。

2. 実践内容

2.1 国際機関と連携

●交流先の選定

海外の交流相手の学校は国際協力機構および国際交流基金などの国際機関、また中国を拠点に活動する学生団体Dot STATIONと連携して選定し、この1年間で本取り組みを10回実施できた。選定基準は次の3点としている。

①日本の言語や文化に興味があるか（相手にとってのメリット・取り組みの意義）

②小国高校の教員と日本語で継続的にやりとりできる担当者がいるか（コーディネーターへの属人化回避・継続性）（写真1）



写真1 小国高校教員と現地校担当者の打ち合わせ

③ICT教育に力を入れているか（ビジョン共感・先進性）

●交流言語とテーマの設定

国際交流への意欲が低い生徒も含めて「現地の学生との対話」から始めることを重視しているため、交流言語は生徒が英語と日本語から選択できる。また自分たちが話しやすいテーマを設定できる。それにより、生徒は自分が質問したいことを口に出すことができ、その後の学習を進めるための興味関心を高めることが可能となる。

表1 オンライン国際交流の実施概要

	交流国	交流先	実施日	テーマ	日本側参加者	交流先参加者	言語	連携先
1	マレーシア	SMK Tengku Intan Zaharah	令和2年10月23日	私は〇〇が好きです	小国高校22名	5名	英語	国際交流基金
2	オーストリア・アメリカ	山形県ALTボランティア	令和2年11月5日	おすすめの場所	小国高校10名	5名	英語	ALT・ボランティア
3	中華人民共和国	清華大学・北京大学	令和3年2月3日	将来の夢・学校生活	小国高校11名	20名	日本語	学生団体Dot STATION
4	マレーシア	Malay College Kuala Kangsar	令和3年3月16日	私は〇〇が好きです	小国高校24名	20名	日本語	国際交流基金
5	アメリカ	Venice High School	令和3年3月19日	私は〇〇が好きです	小国高校24名	12名	英語・日本語	Venice High School
6	中華人民共和国	江蘇省 建陵高級中学	令和3年7月12日	文化の違い	小国高校7名	9名	日本語	国際協力機構
7	中華人民共和国	清華大学・北京大学	令和3年7月19日	アニメトーク	小国高校5名	4名	日本語	学生団体Dot STATION
8	マレーシア	KOLEJ TUN DATU TUANKU HJ BUJANG	令和3年7月5日	私は〇〇が好きです	小国中学校 56名	16名	日本語	国際交流基金
9	マレーシア	SMS MIRI	令和3年7月7日	私は〇〇が好きです	小国中学校 56名	17名	日本語	国際交流基金
10	ケニア・ガーナ・ジンバブエ	青年海外協力隊	令和3年8月30日	カルチャーショック	小国高校8名	3名	日本語	国際協力機構

累計7カ国

累計223名

累計111名

2.2 オンライン交流会の効果を最大化するために

●相手国の概要インプット

交流会前に相手国の文化・宗教・風習・言語などをコーディネーターと相手校の担当でレクチャーを行う。生徒自身が主役となって演劇で歴史を学ぶ時間もある(写真2)。



写真2 交流会前に演劇をしながら世界史を学ぶ

●スケッチブックで言語の見える化

お互いにスケッチブックに4コマ自己紹介を記入し、キーワードを見せ合うことで対話をスムーズにする(写真3)。



写真3 スケッチブックに自己紹介を書き込んで発表

3. 生徒・地域・高校にとって三方よしの成果

●生徒

- ・Googleフォームで集計したアンケートでは毎回90%以上の生徒が取り組みに満足している。
- ・昨年度から小国高校に導入されている1人1台iPadを効果的に活用できるようになった。
- ・個人探究活動で海外の学生と交流会を企画したり、アンケートをとったりする生徒が出てきた。
- ・英語や社会など教科横断的な学びに意欲的な生徒が出てきた。
- ・進学先を選ぶ際、国際的な学びの継続を希望する生徒が出てきた。
- ・本取り組みに興味を持ち、県外から小国高校に入学・地域留学を希望する生徒が出てきた。
- ・日本の外からの視点を学び、自国と小国町の魅力に気づけた生徒が出てきた。

●地域

- ・ICT活用に積極的に取り込む小国町立小国中学校でも国際交流の取り組みが導入され、中学校と高校の協働の機会が増え、中高連携の絆が深まった。
- ・町の広報誌や学校の学級通信などを通じて高校生や中学生の保護者向けをはじめとする小国町民にICT活用の取り組みが周知され、町の教育への注目度が高まった。

●高校

- ・令和3年度から本取り組みが「オンライン国際理解研修」として年間行事に加えられた。
- ・小国高校で例年実施されているアメリカ行きの研修旅行がコロナ禍で中止となり、代替案として本取り組みを実施。本来訪問予定だった提携校の学生とオンラインで交流が実現した(写真4)。



写真4 提携校の学生とオンラインで交流が実現

- ・教員とコーディネーターが協働する機会、ICTを活用する場面が増えた。
- ・新聞や国際交流基金のニュースレターなどメディアに取り上げられることで、学校の活動を全国全世界に発信できるようになった。

【国際交流基金ニュースレターTEMAN BARU】

https://www.jfkl.org.my/files/topics/1692_ext_02_0.pdf

4. 今後に向けて

●活動の継続

交流会を企画・運営しているコーディネーターへの属人化回避のため、引き続き相手校の担当者との打ち合わせには学校側の教員も参加しながら活動を継続していく。

●交流校の段階的な拡大

まだ交流が実現できていないエリア(中東・ヨーロッパ・オセアニア・南米など)に目を向けて、交流校を段階的に拡大していく。

●コンテンツの深化

交流校とのディベート・探究活動・料理教室・オンラインツアー・eスポーツの実施など生徒主体でコンテンツの深化を図る。

小国町教育委員会・阿部 宣行, Bryan Day, 坂口 裕紀